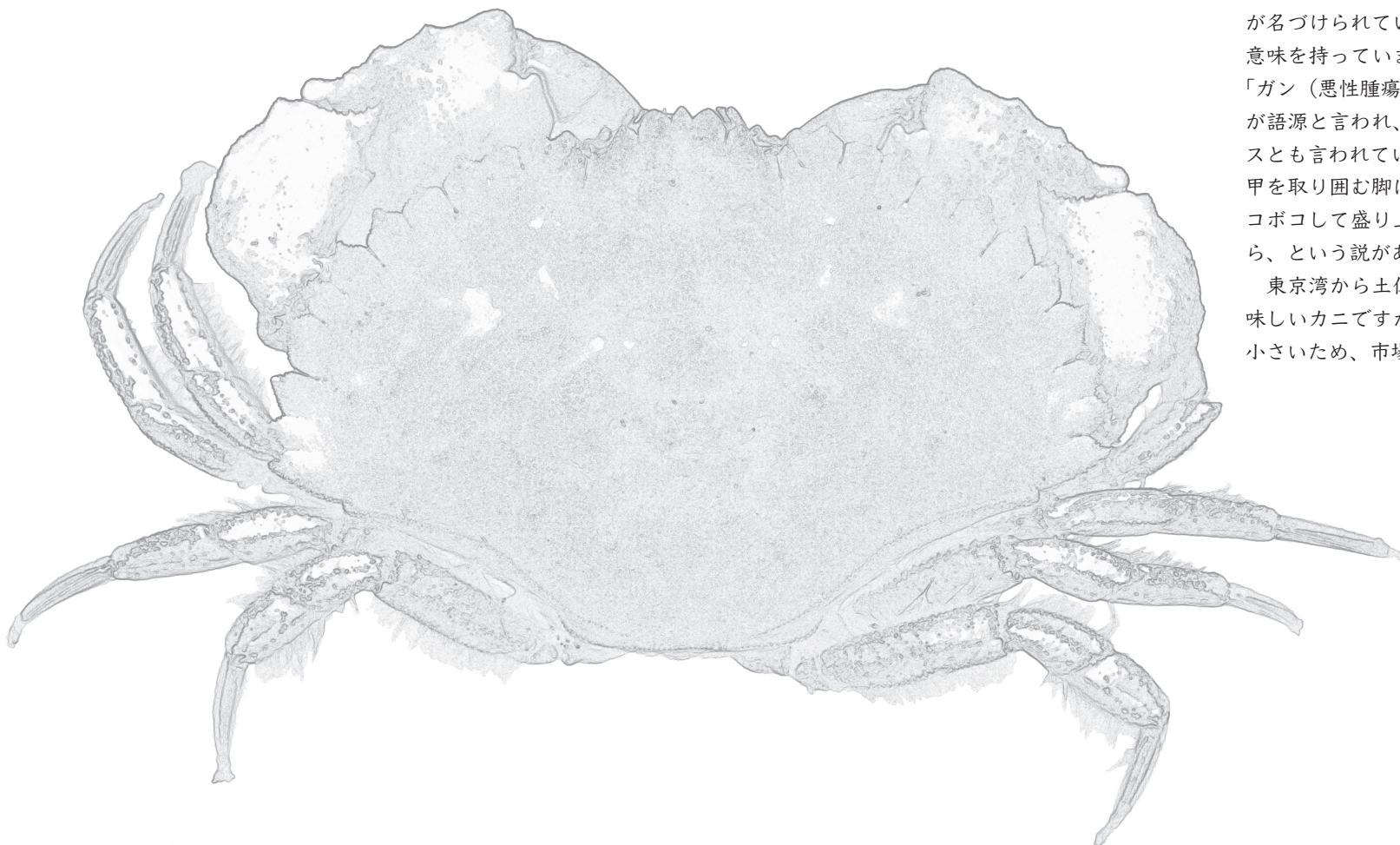




生命の星・地球博物館の標本 de めりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



イチョウガニ

Cancer japonicus Ortmann, 1893

KPM-NH0105017

甲のかたちがイチョウの葉に似ていることから和名が名づけられています。学名は「日本のカニ」という意味を持っています。英語の「cancer」という単語は「ガン（悪性腫瘍）」を指しますが、この言葉は「カニ」が語源と言われ、名付け親は「医学の祖」ヒポクラテスとも言われています。腫瘍を取り囲む無数の血管が、甲を取り囲む脚に似ているから、という説や、甲がデコボコして盛り上がっている様子が腫瘍に似ているから、という説があります。

東京湾から土佐湾にかけて分布しています。大変美味しいカニですが、漁獲量が少ないことと、サイズが小さいため、市場にはほとんど出回りません。



【ポイント】甲には盛り上がった部分があり、甲全体が顆粒で覆われています。脚には剛毛が列生しています。顆粒の質感を表現するのが難しいかもしれません。



神奈川県立 生命の星・地球博物館

Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de めりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



イワガニ *Pachygrapsus crassipes* Randall, 1840 KPM-NH0106352

甲が平べったく、長い脚には剛毛を持っています。平べったい体と長い脚は岩の隙間を左右に素早く動き回ること、剛毛は岩場でスパイクのように滑り止めに使われることに、それぞれ適していると考えられています。日本全国の外洋性の岩礁、いわゆる磯に多く生息しています。食性は雑食性で、小型の動物を捕食したり、他の動物の死骸を食べたり、海藻などを食べたりします。



【ポイント】甲にはたくさんの横方向のしわ模様があり、しわ模様に沿って「▲」が連続するような彩色があります。この甲の模様と、脚の斑模様を上手く表現するのが難しそうです。



神奈川県立 生命の星・地球博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de むりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



ウズラガイ

Tonna perdx (Linnaeus, 1758)

殻の表面にウズラ（鶉）の羽根模様を思わせる斑紋を持つことが和名の由来です。本州中部以南に生息しています。肉食の貝で特に棘皮動物のナマコやヒトデを食べることで知られています。

殻が薄く肉が多いので食用にもされますが、あまり美味しい貝とはみなされていません。



【ポイント】 殻の外側のウズラの羽根のような模様は、一様な色なので比較的簡単。殻口部（殻の開いている部分）の内側の薄褐色のグラデーションを表現するのが難しそうです。

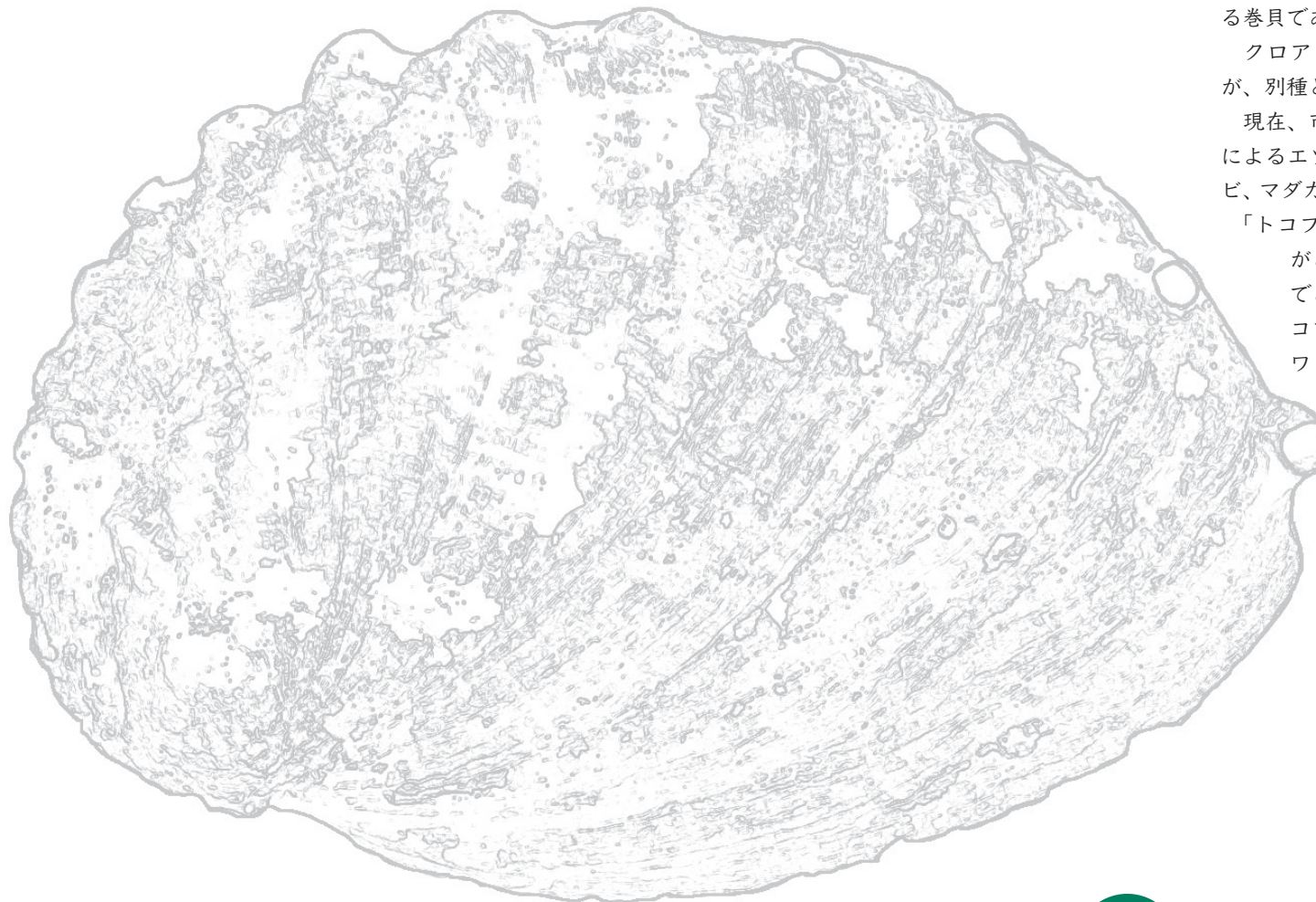


神奈川県立 生命の星・地球博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de めりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



エゾアワビ

Haliotis discus hannai Ino, 1952

「磯の鮑の片思い」のように一見、二枚貝の片方の殻のように見えるのですが、よく見ると殻が巻いている巻貝であることがわかります。

クロアワビの北方に生息する亜種とされていますが、別種とする見解もあります。

現在、市中に出回るアワビの多くは養殖や種苗放流によるエゾアワビで、天然のクロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビは希少で高価なものになっています。

「トコブシはアワビの子ども」などと言われることがあります。殻の孔がアワビでは4～5個であるのに対してトコブシでは7～8個、トコブシの孔は平面上に開いているのに対してアワビの孔は火山の噴火口のように盛り上がっていることで見分けることができます。



【ポイント】成長に沿って大きな筋があり、それと交差する方向に細かい筋があります。これを表現するのがポイントです。

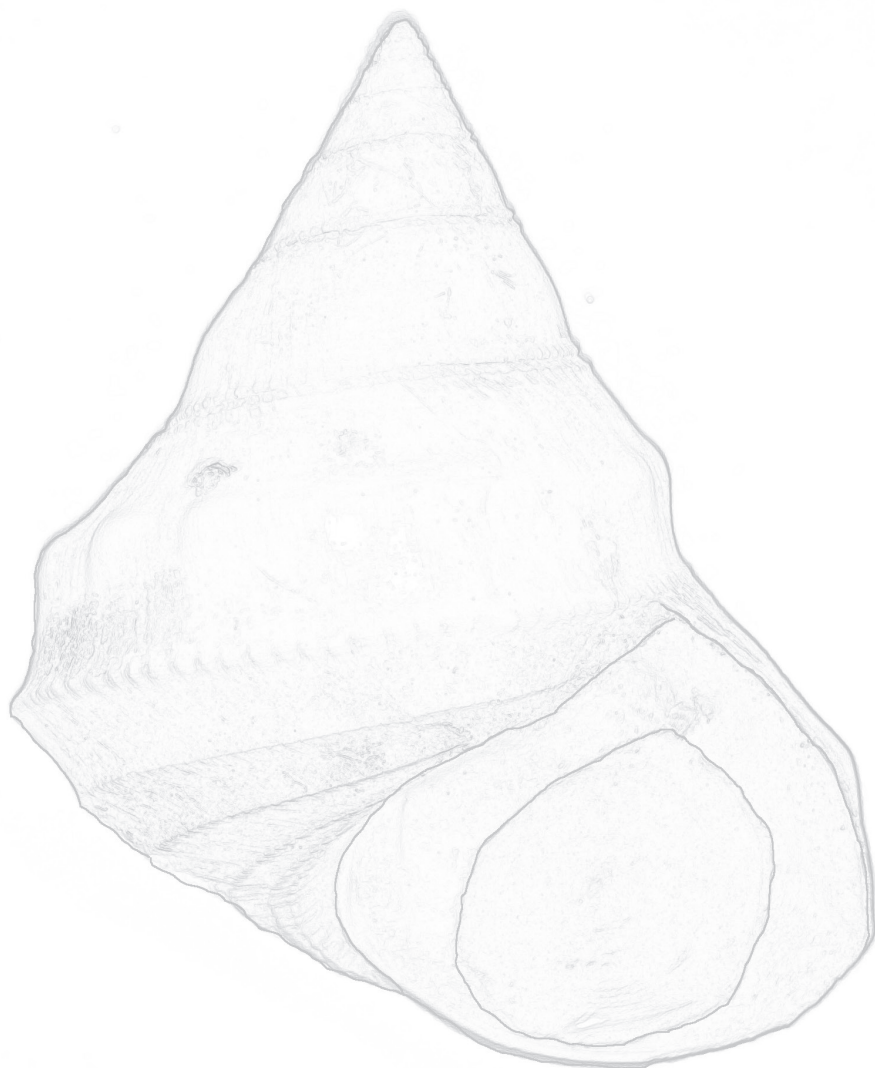


神奈川県立 生命の星・地球博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de めりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



ギンエビス

Ginebis argenteonitens (Lischke, 1872)

生きているときは銀色の地に虹色の光沢を示す、大変美しい巻貝です。本州沿岸から東シナ海にかけての水深 50m 以深に生息し、多くは水深 200m 以深の深海から採集されます。

学名の *Ginebis* は日本語の「ギンエビス」に由来し、*argenteonitens* はラテン語で「銀色の輝き」を意味します。



【ポイント】写真では表現し切れないのですが、乳白色から銀色のような地に虹色の光沢があるのがわかりますか？ フタにもうっすらとした同心円状の模様があります。



神奈川県立 生命の星・地球博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de めりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



【ポイント】ハサミ脚、歩くための脚をよく見ると、根元から先端まで一様な色をしているのではなく、節ごとに微妙に色が違っているのが分かります。これを表現するのがポイントです。

トゲミズヒキガニ

Latreilopsis bispinosa Henderson, 1888

KPM-NH0002792

なみだのしずく型の甲を持ち、非常に細長い脚を持っているカニです。一番後ろの歩脚の先端はハサミ状になっていて、この部分で毒のある刺胞動物をはさんで高く掲げ、周囲を威嚇します。真っ赤な脚でシロガヤのような白い刺胞動物（イソギンチャクやサンゴのなかま）を掲げたときの、紅白のコントラストが水引を連想させることから「ミズヒキガニ」の名がつけられたという説があります。



神奈川県立 生命の星・地球博物館

Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de むりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



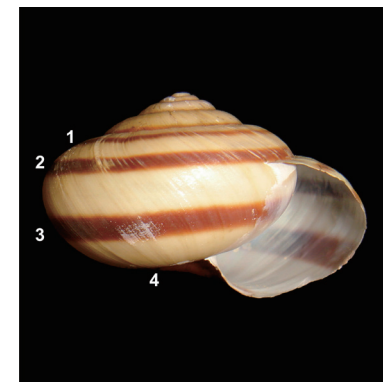
ミスジマイマイ

Euhadra peliomphala (Pfeiffer, 1850)

KPM-NGD000107

南関東地方では最も身近なカタツムリのなかまです。

殻の周縁に3本の濃色帯（下図の123）を持つことから「ミスジ」の名がつけられています。この3本の濃色帯に加えて、殻の基底部（4）も濃色で彩られることがあります。まったく濃色部がないものから4か所すべてに濃色部があるものまで、変異はまちまちです。そこで、「1234」の各部分が濃色であればその数字を、濃色でなければその代わりに「0」を入れた4桁の数字で、色彩変異を表現します。「0000型」「1230型」「0204型」「1004型」など、さまざまな変異が見られますので、お家の近くで見つけたミスジマイマイが何型か調べてみましょう。



【ポイント】成長に沿った縦の細かい筋があり、その筋は焦げ茶色の色帯を横切っています。色を塗るときにはこの縦の細かい筋が連続するように塗るのが難しくそうです。



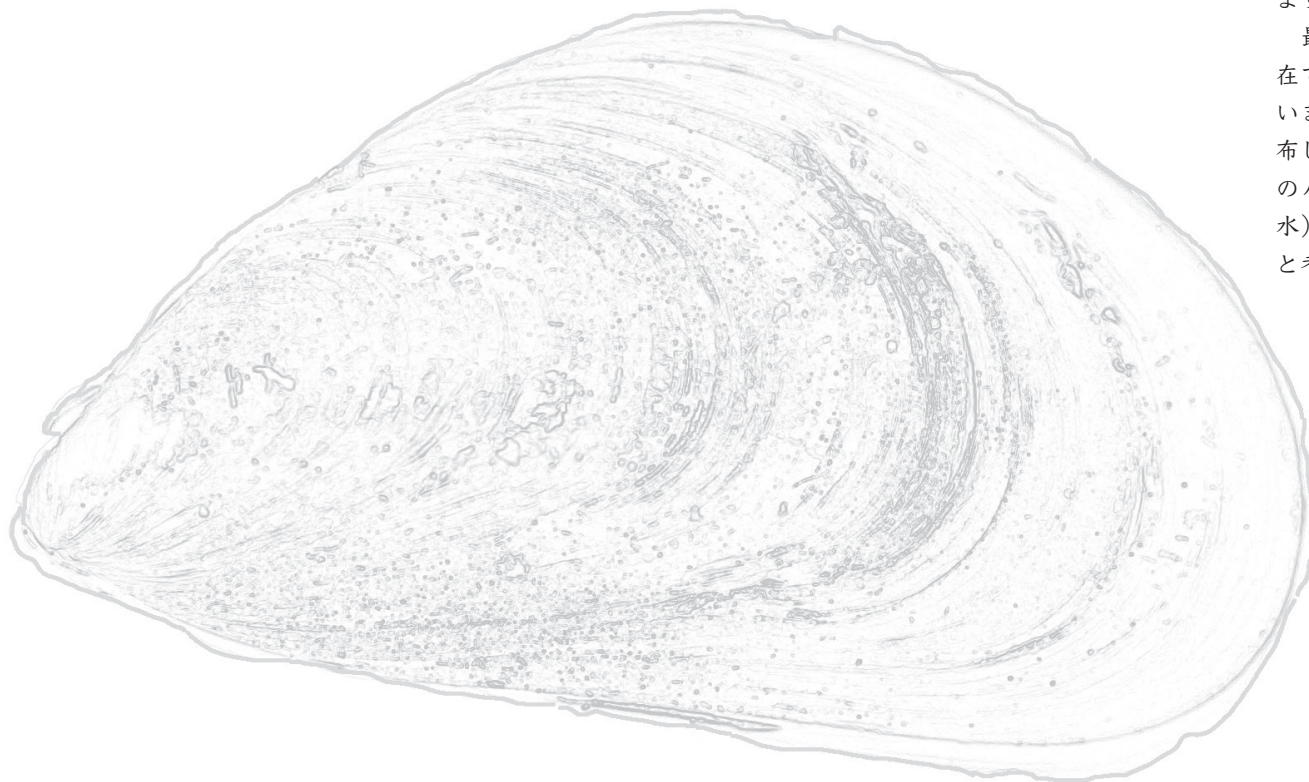
神奈川県立 生命の星・地球博物館

Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de めりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



ミドリイガイ

Perna viridis (Linnaeus, 1758)

本来は日本に分布していない、外国からやって来た移入種で、法律で要注意外来生物に指定されています。

最初に日本で見つけたのは1967年ですが、現在では関東地方より西の温暖な海域に分布を広げています。元々はインド洋、ペルシャ湾、大西洋に分布していたものが、船に付着したり、バラスト水（船のバランスをとる重りとして使われる積み荷の海水）に紛れ込んで、非意図的に日本に持ち込まれたと考えられています。



【ポイント】鮮やかなマラカイトグリーンが目立ちますが、よく見ると幼貝期には褐色の殻を持っていることが分かります。茶色から緑へのグラデーションを表現することにトライしてみましょう。



神奈川県立 生命の星・地球博物館

Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de むりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



ミヤコボラ

Bufo naria rana (Linnaeus, 1858)

貝がらが巻きながら成長していく、180度ごとに大きな肋(太いでっぱり)があります。この肋は殻の強度を増し、外敵から身を守る役割を持っていると考えられています。

大阪湾の周辺地域では食用として非常によく利用されていますが、それ以外の地域ではあまり利用されていません。神奈川県でもあまり見ることはないように思います。



【ポイント】殻は一様な白のように見えますが、よく観察すると殻の外側は淡いオレンジ色、内側は淡い藤色をしています。肋や棘の先端の光沢にも注目してみてください。



神奈川県立 生命の星・地球博物館

Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de むりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



ダイオウホタルイカモドキ

Ancistrocheirus lesueurii (d'Orbigny, 1842)

KPM-NGL000124

春の味覚としておなじみのホタルイカのなかまですが、ホタルイカに比較して6倍ほどの大きさの大きなイカです。体も寒天質でプヨプヨとしており、ホタルイカとはずいぶん違います。インド洋、太平洋に広く分布する種類ですが、食用とされないため、ほとんど知られていません。

詳しくは、生命の星・地球博物館の広報誌「自然科学のとびら」(vol. 21, no. 3, p.17; http://nh.kanagawa-museum.jp/files/data/pdf/tobira/21-3/tobira81_1sato.pdf) をご覧ください。



【ポイント】 暗い葡萄色の表層膜と、乳白色の軟体部本体をむりえでどう表現するのが難しそうです。寒天質の頭部や目もうまく色が塗れるでしょうか。



神奈川県立 生命の星・地球博物館

Kanagawa Prefectural Museum of Natural History



生命の星・地球博物館の標本 de めりえ

- ① 写真を参考にしながら本物と同じような色合いにぬってみましょう。
- ② 空想力をはたらかせ「こんな色の生きものがいたらいいな」と思いながら自由にぬってみましょう。



オオキンセンモドキ

Perna viridis (Linnaeus, 1758)

KPM-NH0004078

キンセンガニ科のカニですが、ほとんど情報がありません。生命の星・地球博物館には相模湾、三河湾、土佐湾で採集された標本が収蔵されています。



【ポイント】甲は細かい顆粒があってザラザラした見かけをしています。ハサミ脚以外の脚は光沢があります。脚は比較的一様な色をしていて、斑紋や濃色の縁取りなどはありません。



神奈川県立 生命の星・地球博物館

Kanagawa Prefectural Museum of Natural History